

「 私たちが伝えなければならないこと 」

長野県 辰野町立川島小学校 6年 おさわ らいあ 小澤 来空

私たちの学校には地域について学ぶ「ふるさと学習」の授業がある。その授業の中で、校長先生がビデオを見せてくださった。昭和 38 年川島地区で起きた横川川の氾らんビデオだ。ビデオには流される家や水防作業に走り回る消防団の人たち、顔を両手でとおって泣いているおばさんたちが映されていた。このビデオをきっかけに、私たち高学年の「三八災害」の学習が始まった。

校長先生は私たちに「地域の人に三八災害のことを聞いてきてください。」と言われた。私たちは、校庭 16 個分の田んぼが流されたこと、川の水があふれ電信柱が半分水につかったこと。そして、横川川で土石流が起きて、10 名の命が失われたこと。色々なことを調べた。

中でも、横川川上流で起きた土石流災害のことが恐ろしく、心に残った。

「土砂崩れがあっても、すぐに掘り出して助ければいいじゃないか。」

と、誰かが言った。でも、先生が見せてくれた土砂くずれの動画や、当時の写真を見ていくうちに、ものすごい力で木や土が流されていく土石流の恐ろしさが分かり、すぐに助けられるようなものではないことが分かった。私は、友だちと「怖いね」と言い合った。

私たちが学んだのは土石流災害の恐ろしさだけではない。こんな恐ろしい土石流から仲間の命を救おうと命をかけて努力した人たちがいたことを私たちは知ったのだ。そのことを教えてくださったのは、小澤幹雄さんというおじいさんだ。

幹雄さんはお父さんを土石流でなくした人。あの日、会社で横川川から材木が「そうめん」のように流れてくるのを見た幹雄さんは、木を切るために大滝沢という山奥に行っているお父さんが心配で、大雨の中を大滝沢に向かった。友だちといっしょに川に橋をかけるために木を切ったり、落ちてくる石に気をつけたりとても苦労して大滝沢に着いたそうだ。大滝沢では、お父さんが避難した宿舎が土石流にのまれ生き残った人はわずか。幹雄さんは大きな声で「おとうちゃー」と大声で泣いたそうだ。

幹雄さんはすぐに助けを呼ぼうとしたけれど、道が流されていてうまく進めない。でも、もう一人矢ヶ崎武志さんという人が反対側の経ヶ岳を越えて助けを呼びに出發してくれた。武志さんは、真っ暗な山の中を走るように歩いたそうだ。そして、遠くはなれた伊那市まで出て、やっと一軒の明かりを見つけ、そのお家から電話をかけて土石流の様子を警察に伝えたのだ。幹雄さんは、「武志さんが伝えてくれたので、消防団の人も自衛隊の人も、次の日の朝には山に来てくれた。勇気がある人です。」

とおっしゃった。命は救えなかったけれど、仲間を守ろうとした人が川島にはいたんだと私は少しだけうれしくなった。

私は幹雄さんに、

「災害の後、幹雄さんの生活は変わりましたか。」

とたずねた。幹雄さんは

「お父さんがいなくなると、三人の妹たちのために一生けん命働きました。」

と答えてくださった。私はお父さんが死んでしまっただけでも悲しいのに、家族のために頑張った幹雄さんは大変だったなと思いつらくなった。そして、災害は家族の生活をこんなにも変えてしまうんだと思った。

学習の最後に幹雄さんは言われた。

「災害がないように三八災害のことを多くの人たちに伝えてください。」

私は、この災害のことを絶対に忘れない！そして大勢の人に災害の恐ろしさと仲間を救おうとした人たちの勇気を伝えたいと私は心に決めた。